

NGO と環境省との意見交換会【2部】3班

1. 参加者（順不同、敬称略）：丸山（F.C.Manis）、藤井（菜の花プロジェクトネットワーク）、篠原（FoE ファシリテーター）、吉澤（日本カーシェアリング協会）、杵本（環境市民）、武田（環境市民、あどぼの学校）、野嶋（環境省）、大川（環境省）、田代（環境省）、
2. 議題：パリ協定が目指す脱炭素社会の構築に向け、第5次環境基本計画の目指す地域循環共生圏の具現化を踏まえ、多様な主体による新規性に富んだ協働・連携の創出
3. 日時：2018年7月25日 15:20～16:20
4. 自己紹介(10分)
 - ・ 藤井：菜の花プロジェクトネットワーク、元々は琵琶湖を抱える滋賀で石鯨運動から始まった活動で全国に広がっている・
 - ・ 田代：これまでグリーン購入、現在は環境教育、ESD を担当している
 - ・ 大川：第五次環境基本計画を担当している。この計画のコンセプトが NGO や自治体などに伝わるのか内心不安
 - ・ 野嶋：温暖化対策として COOL CHOICE 賢い選択の PR を担当、札幌市からの出向
 - ・ 丸山：20 年前にスマトラでオランウータンに出会ってから活動を始めた。ボルネオの中央カリマンタン、タンジュンハラパンン村でオランウータンを守るため、村人の持続可能な生活をともに考え守る、アートを通じた環境教育活動。
 - ・ 武田：ボルネオ島の熱帯林保全、京都の環境市民、中部・関西のあどぼの学校で活動している。カナダの環境 NPO でインターンシップも経験した。
 - ・ 杵本：グリーンコンシューマー、エシカル消費を、環境団体・消費者・人権団体等がネットワークをつくって「企業のエシカル通信簿」などを実施中。ESD や環境首都創造ネットワークにも長年取り組んでいる
 - ・ 吉澤：大震災後に石巻で地域のカーシェアリングの仕組みを作った。豪雨後の岡山で被災後のカーシェアに関わっている
 - ・ 篠原：FoE で様々な活動を行っている。里山保全の活動を八王子でも。
5. 吉澤さんから話題提唱

石巻市でコミュニティ・カーシェアリングをやっている。2011 年当時、6 万台の車が被災した。地方の一人一台文化の非常事態。寄付で車を購入し、共同で車を使用できるようにみんなで鍵の当番、予約等のルールを決めながら活動を始めた。鍵を借りたり乗り合いで買い物に行ったりすることを通じて人の輪が広がっていった。コミュニティー作りの土台として、復興予算を活用して市が団体を設立。仮設住宅から復興住宅へステージが上がった今もサークルとして会則を定め総会も実施して、従来の町内会とも連携しながら活動中。三菱自動車に電気自動車を提供してもらい、自然エネルギーを非常用電源としても活用している。環境という切り口だけでなく防災やコミュニティーを切り口に、石巻市の 11 のセクションが 3 ヶ月に一度集めて活動を継続している。復興財源による市からの委託はもうじき終了するがその後も活動を継続していく。検討委員会を作り、有識者を招き、機械工学を学んでいる学生が授業のカリキュラムとしてタイヤ・オイル交換をメーカー協賛のコラボ

レーションの中で実施する等、大学も巻き込んでいる。災害支援を一つの機会として新しい流れをつくられた。今年の豪雨で被災した岡山においても石巻を事例として行政やディーラーと協働し、環境という忘れがちなコンセプトを入れて活動を展開中。

- ・ (藤井) 災害リスクは全国どこでも。市・企業多様なセクションが協働しているのが素晴らしい。
- ・ (吉澤) コンスタントに意見交換を行うことがキーポイント！やりたい人を中心にはじめることが重要。ポジションはあとから付いてくる。地域の困っている人を集めて進める。今は月 3.5 万円を車代として徴収している。ガソリンや駐車場代を含めると 5 万円？ 積立ても行っており、まとまったお金が集まったらみんなで旅行にも行っている (寄付旅行)。活動を始めて一年経つとそれなりに楽しく自分たちで構築していける。平均ユーザーは 73 歳。最初に少しサポートすれば活動は上手く回り始める。
- ・ (田代) 災害を契機にした地域資源の再デザインのモデルケース。SDGs アワードにも応募を

6. 藤井さんから話題提供

琵琶湖の赤潮。問題の原因は琵琶湖だけでなく流域レベルで考える必要があった。東近江市では多くの団体やセクターが協力しながら、初めはボランティアだが、次第に小金を回して中金、生業へと活動は展開していった。例えば、薪割、福祉、引きこもりを繋げて生業に。得意技の人を繋いでビジネスに。地域で実際に使えるお金は政府から来ない。三方よし基金を自分たちで作った。金融機関も巻き込んで、地域の特色ある人、グループへ投資。どこの地域も活動は多様だが、お金が地域できちんと回る仕組みが重要。山側は水源として絶対に守らなければならない重要な地域。石巻のカーシェアリングが大きなヒントになる！

(田代) 地域資源を認識することを、みんなで発見

(藤井) 負のものをプラスに考えることから始めた。獣害⇒ジビエ、

(田代) 地域資源としてみなされていないものに注目していくことが大切。

(藤井) 人もゴミもみんなお宝。天ぷら油が石鹸、バイオディーゼルになった石鹸運動がヒントになっているからこそそのアイデア。変人が多いことも重要。変人が変人を呼ぶ。

7. フリートーク

(田代) インドネシアでの活動について聞かせてほしい

(丸山) 1970 年代に日本は公害が問題になった。今活動しているこのインドネシアの村が、この先同じ道を辿るのが目に見える。合成洗剤や香りの強い洗剤が川の汚染、皮膚病を引き起こしていると思われる。SDGs の表を見せながら村で話し合いをした際に村人が気になるゴールとして「水」が挙げられたが、水質汚染の概念がまだないことに気付いた。動物の糞尿は汚いが、人間の糞尿やせっけんは汚いと思っていない。洗剤のパッケージには花王と記載されてあっても申し訳なく思った。押し付けではない問題提起が難しいと感じている。パーム油のためのプランテーション森林伐採で多くのオランウータンが犠牲になっている。

(武田) 同じインドネシアの村でも活動をしているが、この一年間滞在して学んできたカナダのガリアーノ島にある環境 NPO で感じたことを共有させてもらいたい。日本の瀬戸内にある島々とよく似た地理的条件の島々の一つ。人口 1000 人。ガリアーノ島には大きな湖や川が無いので気候変動の影響も受けて年々水不足が深刻。団体として雨水利用の勉強会も行っている。周辺の

島々も含めて、深刻な気候変動に対応して持続可能な生活を続けるための地域に根差した活動を環境NPOが進めている。どの島にも環境NPOがあり、働く場があるということが日本との大きな違いだと感じる。気候変動が深刻さを増す今、環境保全や地域づくりは公共事業になるべきだとすら考えている。前職が土木業界だったので、国交省の予算による公共事業の規模の大きさを認識しているが、将来環境省による環境保全や地域づくりがそれに及ぶ公共事業になってほしいと思う。最初の一步は、地域に根差した団体がもっと多く存在し、細やかな活動が行われることではないかと思う。

(野嶋) 札幌では若手で同じ志を持つ人が少ないことが悩みとしてよく聞こえてくる。また人の行動を変えることの難しさも大きな課題。何年も積み重なったライフスタイルを変えることは非常に難しい。そんな中、自分自身で気候変動を実感することは一つのキーになり得る。被災した方々を思うと胸が苦しいが、今災害によって気候変動を身近に感じられることはある意味ではチャンスかもしれない(同感の声多数)。

(杵本) 企業や産業界を巻き込む活動として短時間だか環境市民で実施しているものを紹介する、10数年前に始めた「環境マイスター」研修認定制度。自動車のディーラーを主な対象に、気候変動やグリーン購入などを勉強し、理解確認試験を受けてもらい認定する。もうすぐ認定者数5000人になる。そのマイスターの活動の一つとしても石巻のコミュニティ・カーシェアリングは大いに参考になった。また地域を巻き込むものとしては2001年から10年間実施した環境首都コンテスト簡潔にした「自治体政策評価オリンピック」を昨年度から実施中。パリ協定を実現する為に地域社会でどのようなことができるか、自治体の施策の達成度評価を行いレーティング評価している。またその中で先進事例を見出して表彰をしている。自治体は企業と異なり、真似をしても良いということが大きな特徴。先進事例の知恵を共有する事が大切。

(佐藤) 共感があってこそその協働!

以上

記録作成 環境市民 武田裕希子